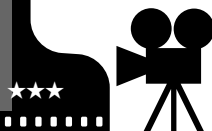


雨の町

2006(平成18)年5月30日鑑賞(東映試写室)



監督・脚本＝田中誠／原作＝菊地秀行『雨の町』（新潮文庫刊）／出演＝和田聰宏／真木よう子／成海璃子／光石研／安田顕／武重勉／草薙幸二郎／絵沢萌子（プログレッシブ ピクチャーズ配給／2006年日本映画／95分）

……人間社会の中に入り込んでいる異生物の「侵入者」は、ハリウッドではエイリアンや宇宙人そして悪魔だが、日本の田舎村の言い伝えではそれが「あまんじゃく」……。コトの始めは、「臓器の無い子供の死体が流れ着いた」というニュース。それを取材する記者が出会ったのは、数十年前に死亡したはずの2人の小学生。こんなかわいい子供が、「あまんじゃく」……。 「悪さ」をしないのなら人間との共存も可能では、とつい思ってしまうがそれはヤバイ……。そして、ひょっとしてあなたのすぐ側にも、こんな「あまんじゃく」がいるのでは……？

菊地秀行という作家は……。 田中誠監督の狙いは……？

この映画の原作は、菊地秀行という作家が書いた『雨の町』というわずか30枚の短編小説。彼は私と同じ1949年生まれで、『妖魔』『魔界都市』『妖獣都市』などの多くの人気シリーズがあるそうだ。もちろん、私は1冊も読んだことはないが、そのタイトルをただで「怪奇小説」作家だということがわかる。

そして、この短編小説のテーマは「侵略モノ」。すなわち、パンフレットにある田中誠監督の説明によると、『『この世には古来から人間とは違うなにかが存在していて、隙あらば人間界に入りこもうとしている』という神話が元になっている』とのこと。また、それがハリウッドでは「宇宙人」になるところ、田中監督はそれをこの映画では、「あまんじゃく」としたとのこと。

そして、その理由は、「侵略者」という概念をSF的にならず観客にわかりや

すく伝えるため、らしい……。

さて、こんな原作を基にした監督の意図は、うまくスクリーン上に表現されているだろうか……？

雨が降ると不吉なことが起こる……？

原作ではずっと雨が降り続けているらしいが、映画では予算の関係上（？）、また観客をうっとうしく感じさせないため（？）、「雨が降ると不吉なことが起こる」というイメージに置き換えたとのこと。しかし、『雨の町』というタイトルどおり、まず冒頭は雨のシーンから。そして、節目節目にうまく雨のシーンを入れ込むことによって、いかにも不吉そうな雰囲気……。

今年の5月は異常に雨が多く、日照時間が少なかったことが報じられている。お米や野菜などの自然の恵みを生み出すためには、日照時間も大切だが、雨も大切。問題はそのバランスだから、一方的に「雨は不吉」というのは、怪奇小説のストーリーづくりのためだけにしてもらう必要がある……？

それはともかく、町役場から車で約1時間という人里離れた山奥の村に伝えられている、「雨が降ると不吉なことが起こる」という言い伝えは、スクリーン上では説得力十分……。

冒頭に「頭をガツン」……

私は「怪奇モノ」や「ホラー映画」は好きではないし、「絶叫モノ」は願い下げだが、この映画では冒頭に、文字どおり「頭をガツン」と打たれるようなシーンが……？

山奥の村にある一軒家の中に住むのは、おじいさん（草薙幸二郎）とおばあさん（絵沢萌子）の2人。こんな家の外で、「お父さん、お母さん」と叫びながら、必死に家の中に入れてくれと玄関を叩いているのは、小学校の制服を着たかわいい男の子。ところが、なぜか2人とも必死でその声を無視して、家の中へ入れることを拒否している。それはなぜ……？

そしてそんな中、突然男の子の後ろから近づいてきた男（武重勉）が、男の子の頭に黒い布をスッポリとかぶせたうえ、持っていた鉄棒でその頭をガツン……。

一体なぜそんなひどいことを……、と観客は一様にビックリするとともに、その後の展開に集中することに……。

ルポライターへの取材命令は……？

世の中には二流、三流の週刊誌もあれば、エロ雑誌、SM雑誌その他「ガラクタ的雑誌」が山ほど溢れているが、怪奇モノ雑誌のニーズというものは、必ず一定量はあるらしい……？

ルポライターの兼石荘太（和田聡宏）が勤める会社は、どうもそんな会社。兼石はそんな仕事にいい加減うんざりしているらしいが、編集長（光石研）は、「それがわが社の生きる道！」と割り切っており、「ある地方都市に内臓が全く無いという子供の死体が流れ着いた」というニュースを聞くと、直ちにその取材命令が兼石に対して下された。

ひょっとして、臓器売買をめぐる黒いやミの世界を取材できるかも……。それが編集長の狙い。

兼石は1度は拒絶反応を示したものの、業務命令となれば仕方なし。その町に到着した兼石は、まずは子供の死体が安置されている坂口病院へ行き、坂口医師（安田顕）と面会したが……。

ウソみたいな話その1

怪奇小説にはウソみたいな話が登場するのは当然。その第1は、死体が兼石と医師の目の前で突然起き上がり、走り出していったこと。これでは、死体検案書にサインするために死体を解剖しようとしてメスを当てたところ、「子供の身体が風船のようだった」「身体を開けてみると中に臓器がなく、空っぽだった」という体験をした坂口医師が、その後、気が狂ったようになってしまったのもやむをえないかも……？

ウソみたいな話その2

逃げていく子供を見失った兼石は、次に町役場の職員から、35年前に起こったというひのえ村での小学生の集団失踪事件の話聞かされた。そして、町役場の

女性職員、香坂文緒（真木よう子）の車でその小学校へ出かけたところ、今は廃校となっている教室で、死体で見つかった子供たちの写っている古いアルバムを発見した。そして、子供たちが消えたといわれる場所まで1人でやって来た兼石がそこで出会ったのは、小学校5年生の女の子、絢子（成海璃子）と小学校1年生の男の子、伸。この2人が胸につけている名札を見れば、何とそれは写真の中の姿と全く同じ2人。なぜこんなことが今……？ これが、ウソみたいな話の第2……。

日本版（？）ヴァンパイアの妙は……？

絢子と伸の2人の子供は、兼石からやさしく「お家へ帰ろう」と言われると、しばらくは兼石の後について歩いたが、兼石が道路に出るといつの間にか消えてしまった。そして、兼石が入っていったのが、老夫婦が住む山奥の一軒家。そこで兼石が老夫婦から聞いた何とも不可解な話とは……？

それがこの映画のポイントだが、そのネタばらしはできないので、映画を観てのお楽しみに……。

ひと言だけ言っておけば、皆さんご想像のとおり、この2人の小学生こそが「あまんじゃく」で、いわば人間の姿をした日本版ヴァンパイア……。老父の話によると、「あまんじゃく」退治のためには、その頭を粉々に打ち砕く他ないとのこと。そして、今でも小学生の姿をしている伸は、この老夫婦の長男。さらに、冒頭に登場した男は実は伸の弟で、家を訪ねてくる「あまんじゃく」退治のために精を出しているというわけだ。

そんな何とも不可思議な物語が、山奥の一軒家の中で静かに語られていく様子は、実に不気味……。

そして、そんな目で2人の小学生の姿、とりわけ、その歩き方と1点を見据えたような目の威力を見ていると、どことなく不気味……？ もちろん、これは演技によるものだから、その演技力は恐るべきもの……？

数年後、舞台は東京に……

かなり迫力ある（？）山奥の一軒家での出来事が終わり、今、兼石は東京のマ

ンションの一室で本を読んでいる。事件の取材を終えた後、あんなバカバカしい会社とは縁切りだとばかりに退職してしまった兼石が、今どんな風にして生計を立てているのかはよくわからないが、その部屋は2LDK くらいありそうだから、わりと安定した生活の様子。

こりゃ、あの町役場の職員、文緒と結婚しているなど思ったら、案の定……。そして、あの老夫婦の家で長男の伸は老父が準備していたある仕掛けによって、頭を粉々に打ち砕かれたものの、まだ絢子は生き残っている。したがって彼女は、きっと兼石の部屋を訪ねてくるだろうと思っていたら、これも案の定……。今日は、ホントに俺のカンがよく冴えている日……。

 「あまんじゃく」は不滅です。「あまんじゃく」はあなたのすぐ側にも……？

東京のまちを歩いていると、小学生の男の子や女の子はゴマンといるのが当たり前。したがって、その中に絢子が1人紛れ込んでいても、他人に無関心な都会人にはわかるはずがない。ヴァンパイアだってあまんじゃくだって、敵対心を示さない人に対してはやさしいもの……？

とりわけ、絢子は最初出会った時から兼石のやさしさに魅かれていたから、あの山奥から東京に出てきたのは、実は大好きなお兄ちゃんにどんぐりを手渡すため……？

しかし、あの山奥の一軒家でのむごい出来事を目撃し、体験した兼石にとっては、既に絢子は恐怖の対象……？ したがって、親しげに兼石に近寄ろうとする絢子の頭を兼石はしたたかに打ちつけた……。さあ、これによって世の中から「あまんじゃく」をすべて駆逐できたのだろうか……？

今日も、文緒と2人、東京のまちの中を仲良く歩いている兼石の目には、伸によく似た男の子の姿が……？

2006(平成18)年6月1日記